特集『そうぞう』

いじめの傍観者にならないで

～子どもたちの将来と私たちの未来のために～

いじめは、重大な人権侵害であり、決して許されることではありません。

しかし、文部科学省が実施した調査によると、令和6年度の小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は過去最多となりました。

いじめを防止するためには、どのような対応が必要なのでしょうか。

子どもの発達を科学し、いじめなど社会課題の解決に取り組む、公益社団法人 子どもの発達科学研究所で所長を務める和久田　学さんにお話を伺いました。

Q1 いじめの現状について教えてください。また、和久田さんがいじめ問題を研究されている理由を教えてください。

近年、子どもたちの間で起きているいじめの傾向としては、SNSを中心に、大人の目が届きにくい形で深刻化することが増えています。文部科学省の認知件数は過去最多とされていますが、これはあくまで学校が把握した数であり、実態はさらに多い可能性があります。SNSをはじめ、交際関係、部活動等の閉鎖的な環境でのいじめは、表面化しにくく発見が困難だと言われています。

なぜいじめがなくならないのか、世界中では、様々な研究がなされて、ある程度いじめの防止策は分かってきています。一方、日本では子どもの発達に科学的観点を取り入れることが浸透しておらず、学問として語ることが難しいことから、子どもたちがいじめの現場に直面した時、大人は自身の経験を基にして、その時の感情を語ったりアドバイスをしたりする傾向があります。

こういった状況を踏まえ、日本の教育現場に、科学的根拠のあるいじめ防止策を実装するために研究をおこなっています。

Q2 なぜ、いじめは起こるのですか？

いじめが起こる要因は様々ありますが、子ども自身がいじめを「これは遊び」「みんなやっているから大丈夫」と誤認しているケースがあります。つまり、いじめをしている子どもは、無意識でも知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまい、客観的にみるといじめに該当する場合があります。このように多くの子どもは、「いじめはダメ」と頭ではわかっていても、自分の行動がいじめに該当するか正しく判断できないことがあります。これを"シンキングエラー®※1"と呼んでいます。

いじめをしている子どもがシンキングエラーを起こす原因の一つは、身近に同様のシンキングエラーを起こしている人がいること、つまりモデルの存在があることだとされています。

例えば、家庭状況や、YouTube等の動画サイト等に、人権侵害につながる言動が隠れていて、無意識にその影響を受けることがあります。他にも、部活動等の閉鎖的な環境では、指導であることを理由に、今もなお、人権を無視した言動がなされることもあります。

つまり、子どもたちがシンキングエラーにより間違った行動をする背景には、無意識のうちに大人や社会の影響を受けている可能性があると言えます。子どもが誤認して、間違ったことをすることは当然起こり得ることですが、いじめは絶対に許されないものということを皆が認識して、子どもたちのシンキングエラーを正し、未然に防止することが非常に重要です。

※1「シンキングエラー」は子どもの発達科学研究所の登録商標です。　※2 ここでは「このいじめが行われている場所に居合わせた子ども」をいう。